

紹介

三木与吉郎編

『阿波藍譜』史話図説篇

安岡重明

江戸時代の経済発展は、その一つがいわゆる特産物生産という地域的分業の形をとって進行したことは周知の事実であり、その顕著な一例として阿波藍があつたことも、広く知られているとおりである。こうした特産物の生産・流通の問題は、近世経済史研究のもっとも主要なテーマのひとつとなっているが、一般的な解明はなかなか困難な問題である。ことにそれら主要な生産物生産の多くが近代工業発展の過程に衰滅してしまつた今日においては、一般の関心がしだいに消滅してゆくから、なおさらである。たとえば、木綿・菜種・榎・砂糖等々をとつてもよかるう。近世経済史の研究にとって必須の問題も、おののについて生産・加工・流通・統制の諸側面を全面的に解明されることはいかにもすくなかつた。なるほど古人の記録はすく

なからずある。しかし現在の関心から再構成されることはまれであつた。永い戦争とそれに伴う社会変動は、学者の関心をきわめて「時事的」なものとし、地道な史実の追求は、好まざるものともみられがちであつた。あれほど問題にされた木綿の研究でさえ、まだ新しい水準での総合的研究があらわれない状態である。

こうした事情をみるにつけても、三木産業株式会社が阿波藍研究にたゆまない努力をつづけてこられたことは、まったく敬服に価する。すでに『三木文庫所蔵庶民史料目録』第一輯（昭和三十一年）、第二輯（昭和三十三年）、『阿波藍譜』栽培製造篇（昭和三十五年）を出版し、学界の注目をあび、今回さらに、『阿波藍譜』史話図説篇を刊行された。本文二二七頁、文献その他八〇頁、阿波藍に関する諸統計（附、明治初期全国藍産表）一八八頁、合計四八五頁にわたる大著であり、この中には、阿波藍の生産・加工・取引などに関する写真が三百数十葉収められている。これらの図版は、阿波藍に無知なわれわれに実物教育をしてくれるまことに貴重なものである。編者従来の「業界史は業界人で作れ」という主張が見事に生かされ、部外者が少々調査してもわからない諸事実が、あきらかにされている。

そこでつぎに、本書の構成を紹介してみよう。

自序

凡例

口絵

- 一 商品としての特産
- 二 藍の醗酵建法と紺屋
- 三 紺屋雜記
- 四 阿波藍作付面積の消長と耕作栽培
- 五 藍の製法と製品の鑑定
- 六 明治以降の阿波藍生産販売状態
- 七 阿波藍・印度藍・人造藍
- 八 峰須實家と阿波藍の発展
- 九 阿波藍染色の概観
- 一〇 売場株と阿波藍商の巨賄
- 一一 江戸藍玉寄屋と大阪の阿波藍問屋・倅賣仲間
- 一二 阿波・江戸・大阪の藍商生活概相
- 一三 阿波以外の藍作状態
- 一四 徳島県の藍行政と阿波藍製造販売同業組合を軸とする諸種相
- 一五 藍と郷土阿波
- 一六 参考文献

阿波のブチニウ、三木文庫、『三木文庫所蔵庶民史料目録』
 畫評、『阿波藍譜・栽培製造篇』畫評、阿波藍に関する諸統

計、阿波藍の手帳紙（袋入添付）

以上の本書の構成にしたがって、内容の概要を紹介してみよう。

二

一章は、主として近世までの藍の歴史をのべ、大宝年間（七〇一—三）には藍が染料として用いられていたとする。

二章は、藍の醗酵建法の工程をくわしくのべる。醗酵建法に用いるカンには説明できないのは当然であるが、その工程とそれに要する諸道具がくわしく説明され、「灰汁と灰屋仲間」、「紙染屋・青屋」、「藍釜と加温設備」、「紺屋の作業」などにときおよんでいる。

三章の紺屋雜記では、村海生活と紺屋、西国における紺屋の分布状況の瞥見、諸都市における紺屋町と江戸・大阪における紺屋の組織・業種、紺屋に対する課税、尾張・松坂・若狭・近江八幡の紺屋などを部分的に紹介している。こうした観点からであれば、都市商工業者中における紺屋の地位などを検討してみても面白かったのではないか。たとえば博多については藤本隆士氏の整理があり、紺屋の地位の見当がつけられる（宮本又次編『藩社会の研究』三七四頁）。

四章 阿波藍作付面積の消長と耕作栽培では、作付面積の變

化、現在の栽培地帯を検討し、吉野川との関係をあきらかにしている。また栽培方法、品種、肥料の問題もあきらかにしている。

五章 藍の製法と製品の鑑定においては、葉藍の収穫から染の製法、水師の職能、藍玉藍俵、藍玉算用法、藍砂、藍搗、品位の鑑定を具体的に図版・写真を用いて説明する。私などは、藍の統制に言及したことがあるにもかかわらず、藍玉とはいったいどんなものか知らなかった。その製法の解説は懇切をきわめているので、一読してその製法工程を知りえた。

六章 明治以降の阿波藍生産販売状態においては、江戸時代の阿波藍移出量、明治以降の生産・市販状態を数字によって示している。明治期の藍作付段別表、藍玉移出表、阿波藍供給区域表は極めて興味深い。

七章 阿波藍・印度藍・人造藍においては、阿波藍の競争者となったインド藍、人造藍と阿波藍の性能を比較し、阿波藍衰退の事情をあきらかにする。

八章 蜂須賀藩と阿波藍の発展においては、蜂須賀家と阿波国の関係からときおこし、阿波藍の起原説を紹介する。藍作は、秀吉の四国討伐（一五八五）の直後入国した蜂須賀家政以降とする説をしりぞけ、蜂須賀家領有以前から行われたとしている。

九章 阿波藍統制の概観においては、藩の藍作役所の濫觴、享

保年間の江戸為替制度、藍統制の変遷、阿波藩札と行着銀制度、明和四年の藍大市の開催についてのべる。

一〇章 売場株と阿波藍商の足跡においては、阿波藩が阿波藍販売統制の機関であり、藩の財源のひとつであった売場株の分布状況、売場株の明治以降における変化を示し、阿波藍商人が全国各地に進出していかに活躍したかを史料によってあきらかにしている。

一一章 江戸藍玉問屋と大坂の阿州藍問屋・仲買仲間。ここでは江戸・大阪における阿波藍の流通組織の発生とその機構、納屋物から蔵物へと転化する過程、阿波藍関係の業者の講についてべる。阿波藍蔵物化の問題は、大阪絵具染料同業組合編『絵具染料商工史』（昭和十一年刊）にも詳しくのべられているが、江戸後期における政治史・経済史にとって重要な問題を含んでいる。明和中期建議には、大阪問屋と荷主の取引関係の一部をあきらかにしており、当時の価格形成の一面を具体的に示している。ただ残念なことには、荷主の売却価格と大阪の藍玉相場の関係があきらかでない。また安永期の土佐新の問題と文化期の阿波藍の問題を等視されているのは疑問である。

一二章 阿波・江戸・大坂の藍商生活の隣相には、阿波小松浦の長者講と大藍師の信仰、藍屋与吉郎「江戸店式法」、江戸藍玉問屋支配人・手代・子供、江戸店藍商の菩提寺、大阪阿州藍仲買伊丹屋庄助の取引の実際、徳島直調・難波・木津の地藍、

伊丹屋の一統内などをのべる。

一三章 阿州以外の藍作状態においては、摂津藍・武州藍・芸州藍・尾州藍・仙台藍・筑後藍などの拾頭、鳥取藩・岡山藩の藍政、明治初期の全国葉藍産量などを概説している。文中『京藍は次に述べる「摂津藍」とともに、阿波藍よりも先輩であった。が、果して近世資本主義経済時代の商品作物たる条件を具備したか否かはすこぶる疑問である』(一七五頁―傍点安照)とされるが、傍点の部分は用語が不適當である。

一四章 徳島県の藍行政と阿波藍製造販売同業組合を軸とする諸種相。ここでは江戸時代の多くの特産物とともに消滅してゆく河波藍の諸様相がのべられている。明治元年の混乱、藩政から県政への移行、阿波藍専売派と外藍併売派との抗争、人造藍に対する阿波藍保護税、精製事業と阿波藍、阿波国共同汽船会社の設立、藍肥料の近代化、阿波藍商と輸入染料関係などである。

一五章 藍と郷土阿波では、阿波の民俗と文芸が紹介されている。

「阿波藍に関する諸統計」は第一・二・三部からなり、第一部は『阿波藍譜・裁著製造篇』の付録「阿波藍に関する諸統計」を補正したもので徳島県統計室、阿波藍同業組合の調査、大阪省の統計から採集したものである。河波藍の作付反別、製藍

高、移出高、供給高、相場、関係業者数、商専会社(社名・創業年月・資本金・積立金など)、天然乾藍輸入高、人造藍輸入高等の年表がある。

第二部は、府県物産表、全国農産表、農商務省・商工省・農林省の統計類から、地域ごとの藍生産高を示している。

第三部は、諸統計の解題・解説であつて、懇切に資料批判を行なっている。

以上の統計には、おのおの註がつけられ、数字の誤差、疑問とする数字には、相當の解説がつけられている。私は六年前、明治十年の全国農産表の藍に関する数字を無批判に使用して(原本をみる事ができず、孫びきせざるをえなかつた事情にもよるが)、あやまちを犯したことがあつた(近世畿内綿作の動向と商品流通、大阪大学経済学六巻一八〇頁)。陸前・但馬の数字に疑問がある点である。ここでもやはり、この点に疑問ありと指摘されている。ここで示されている統計数字の批判は、阿波藍とその歴史に強い愛着をもたれている編者・筆者ならではの配慮であろう。私は藍の問題にも統計にもくらしい者ではあるが、本書に収められている藍に関する統計は、現在もつとも安心して利用できるものであらうと思つている。これら諸統計は藍に関する重要な統計を網羅しているから、明治以降の藍生産の動向を把握する上に、貴重な役割を果すであらう。

三

以上の紹介に示されたように、本書は阿波藍の生産・流通・消費（紺屋）の各部門にわたって入念に調査された阿波藍に関する小百科ともいふべきものである。藍の生産といつても決して通りいっぺんの敘述ではない。葉藍の生産から藍玉の仕上りまで、複雑かつ多岐にわたる諸工程を明快に説明している。流通に關してもそうである。また、藍の消費者たる紺屋における作業工程、品質の鑑別法までときおよび、附録には鑑別に用いた手板紙の实物までそえられているのである。さらに藍そのものの科学的性質を印度藍や人造藍と比較している。専門学者の研究のように狭く限定された特定の部門だけにくわしいといった種類のものではない。藍に關することは、ほとんどあらゆる方面にわたつてのべられているのである。編者年来の主張はいかされたといふべきであらう。とはいつても、諸部門の専門的研究を無視されるどころか、参考文献に示されているように、最近の研究にも注意をはらっている。「過小階級」（六一頁）のように一部用語に不適當な箇所もあるが、大して問題ではない。

ただ私としては、本書において江戸期の価格の面に考慮のすくないことが残念である。部分には言及されているが、もう少し整理するべきではなかつたらうか。ことに大阪市場と荷主

の關係、取引仕法の改善、藍の蔵物化とか、各地における競争藍の出現には、必ず品質の問題のほか、価格の問題がからんでいる。そうした意味の阿波藍の価格の年表とか、生産者価格、荷主の大阪（あるいは江戸）での売渡価格、大阪市場相場あるいは地方での売価などについても、データをそろえて頂いたら、という望蜀の希望をもつものである。

最後にこうした貴重な文献を刊行された編者・著者に深い感謝の意をあらわすとともに、今後とも学界の進歩のため寄与下さるようお願いしたい。

〔昭和三十六年十一月、三木産業株式会社発行（徳島県板野郡松茂町中喜来）、A5判 四八四頁。〕